

氏の遺業を繼いで地質鑛物方面の研究を今後も進めて行かれるのであるが、他の方面の研究者も續出せられんことを小山進氏の逝去に際して心から祈る次第である。

人生五十有二年彼れの此の地上に呼吸した時間には短かきに失し、其の永眠は惜しみても餘りある。然し人の一生を其の在りし日の數によつて計へしむること勿れ、彼れは既に郷黨の尊崇を一身に集め、彼等の心中に永遠に生くべき所を見出し、又た信濃の山野は小山氏が二十年の踏査によつて其の自から語る事能はざりし神秘を我等に明にし、胸襟を開いて郷黨と共に融合するの日の早からんことを待つて居る。

小山進氏の生涯に其の一生を有意義に送られた人類の尊き一例を見出し、彼の精神が多數の後繼者に宿つて永遠の生命となり、彼れの短き一生に恨みなからしめんことを。謹みて此の一文を佛前に捧げる。

新著紹介

○地理論叢

第五輯

京都市帝國大學文學部地理學教室編

菊版二二三頁 東京古今書院發行 昭和九年十二月

定價二圓二〇錢

關西に於ける人文地理學研究の中心たる石橋博士主宰の地理學教室は地理論叢として其處で行はれてゐる成業を公にしてゐるのは矚目に價するが矣繼速やに其の第五輯が發刊されたのは地理學界に對し慶賀の到りに堪へない。本論におさむる所は次に掲ぐる如く研究及報告として六篇、資料及餘録としての三篇である。國の内外に亘り各種の人文を取扱つてゐるので精彩陸離たるものがある。(S)

小牧實繁 本邦海岸砂丘固定作業史の斷片(第三報)

田中秀作 獨逸民族の海外植民に就いて

野澤 浩 廣島市の發達と其の人文現象の地域的考察

増田忠雄 文化圏の外殼の研究 第一報 牧場―特に甲斐の馬牧につきて―

室賀信夫 飛騨國の交通系に就いて―二三の歴史地理學的

考察

米倉二郎 肥前平野の條里(豫報)

織田武雄 Piri Reis の地圖と Columbus の地圖

小牧實繁 日本に於ける聚落の高距離限度補遺

古地圖目錄 其の二

○市町村別日本國勢總攬

四六倍版 上中下三卷

帝國公民教育協會發行 昭和九年十二月 定價四〇圓

本書は内地植民地並に滿洲國の地誌及統計を編纂したもので内地と樺太では市町村制に沿革、地勢、戸數、人口、面積、財政、産業、社寺、名勝、人物、交通等を記述し、外に官衙や學校の表、卷末に會社要覽が附載されてゐる。各町村の地理的状況を概観するに役立つものである。例言中に地名索引が附いてゐると記してあるがそんなものは三卷中に收められて居ない。それが爲めに本書の利用を著しく不便にしてゐる。かゝる尅大な個別列舉體のものに索引をつけられないのは親切な出版物と云へない。(S)

○綜合郷土地誌集成

小牧實繁監修 日本出版社發行
定價四圓五十錢

菊版七〇二頁尅大な大冊であるが、幾分は紙質の關係もあるらしい、日本三府四十三縣、北海道、樺太、臺灣、朝鮮にわたつて各中等學校の地理科の教員を動員して出來たものであるから、簡単な分縣地誌集といふ形になつた、執筆者のうちには知名の健筆家も多いことであるが、何としても一縣に十頁内外を與へる程度であるから、テキストは精髓をのべたといふ主張もあるであらうが、読む者からは、あまりに簡単にすぎるといふ疑が發生しないとも限らぬ、しかし其地方の確實な資料によられたものとして、參考にはなること、信ず

新著紹介

るが、地理書はかうした分縣的の説明では若干物足りなきが伴ふことを恐れる。どうしても地方誌の外に、日本の總説が必要である、それは一縣一人では出來ない、故にもしもかうした知名の人々を集めるとならば、も一度徹底的に地方を詳述したもの、それを纏くと地名辭書にもなるやうな程度のものを監修して頂きたいものだと思ひ。編輯者たる廣瀬君及畑中君の今一段の決心と、書肆の更らに犠牲的投資を仰がざるを得ない。(藤田)

○日支交渉史話

秋山謙藏著 内外書籍株式會社發行
定價三圓五十錢

本年一月出版された歴史地理の書としても、亦今日までに出版された多くの日支交通の歴史書に比べても共に斷然頭角を抽んでた快著であるといつて差支へない、菊版五百七十四頁、挿圖として廣興圖の日本や日本考略の日本地理圖六版のつてゐていかに支那人や朝鮮人が日本を理解せんと努力したか、詳細に述べられてゐる。内容は古代の日支交渉から佛教傳來、日唐貿易、アラビヤ商品と平安貴族日本貿易や西域遊戯、徒然草と支那錢、朝鮮使節の見た中世日本、日明貿易、琉球、瓜哇船渡來、おもしろさうし、朝鮮王國、應永の外人、ポルトガル人のマラツカ、ゴレス、倭寇、女眞船等三節であつて、秋山氏は夙に倭寇の研究家であるといふ評判の通り倭寇については最も論述が多い、古代の日支交渉についても議論未だつくまゝあるものがあるが、何にしても著者十年孜々

三三

七一

とした勉學の結果であるといふことである、單に歴史家といはず、地理學者もこの書を読んで教へられる所が多いことゝ信じ敢て江湖にこの書をすゝめる。(藤田)

雜報

○英國人の見た日本

マンチエスター紡績聯合會幹事

ビース氏は曰く、

日本の紡績業は本世紀初より發展し大戰後に於て現在の段階に達したが、今日では綿製品の最大輸出國で、棉花の消費は世界第二位である、日本の綿製品は他國品より二割五分乃至五割方安い、これは日本國家の補助金の爲でなくて、主として圓價下落の爲であつて、この結果勞銀五割生産費一割五分乃至一割八分低くゝなつた、しかも圓貨低落に不拘、一般物價は殆ど高くならない。商船所有權は世界第三位で、戦債はない。

勞銀は最近可成騰貴し今後もあるといつても英國や瑞西等の水準には達しない、日本では男子は骨の折れる農業勞作に従事し、工業勞働は女子幼年工に委せらるゝ結果其賃銀は割安である、此等勞働者の多數は軍隊式の寄宿生活をするが其設備は良好である、勞働組合に加入せるものは少く、罷業は稀である、重役の俸給は英國、瑞西に比して約五分一で企業組織は整頓し原料の買入、製品の價格は統一されてゐる、

概して日本人は用意よく融通性にのみ沈着にして且つ誠實が最良の商業道德であることを知つてゐる、猶關係各人は國家に奉仕するを以て終始し全國民は一丸となり一國家トラストとして活躍して居る。

日本の工場の成功せる主要原因の一は其技術である、日本紡績は英國よりも一割方能力が高く國産機械を使用するといふ長所がある、然も其原價低廉にして豐田式の如きは日本では僅に二十四磅なるに英國では六十四磅を支拂つてゐる程である、一般に織機は日本の方が歐洲各國よりも二割五分は低廉である、外國製機械では瑞西製品が正確且能率よいものとして用ひられ晝夜二部更迭制を守つてゐる、これは日英會商の際本制度の廢止を要求したけれども日本は承知しなかつた

英國は日本品に對し割當制度及輸入制限をやつたが右は時期尙早である、濠洲の如きは日本との通商に満足し、印度の農民は依然安價な日本品を歓迎してゐる、日本は無數の扉を有する室内に居るやうなもので一方を閉すと他方へ出るの目下南米へ注目してゐる、元來割當制は暫行的のものであり高關稅も亦健全な制度でない、英國が日本品に高い稅を課した結果、日本は支那と妥協したではないか、日支間の政治的紛争は既に清算されてしまつた。

歐洲人は日本人が其收入に應じた生活をなして居る點を學ばねばならぬ。

以上は氏の購演要旨であり、主としてパーンピイ脚滿洲視